

知事対談

早田卓次 × 仁坂吉伸

1964年東京オリンピック 和歌山県知事
金メダリスト



バスケットやバレーが可能なアリーナや多目的ホール、トレーニング場を併設する日本大学文理学部百周年記念館にて。

甦るオリンピック。ピックの感動、スポーツが繋ぐ未来。



半世紀以上の時を越え、甦るオリンピックの感動。当時、多くの人に勇気と希望を与え、日本の高度経済成長期における一大イベント。鮮烈な記憶を残し、日本体操界の発展に尽力した、和歌山出身の金メダリストが語るヒストリー。

仁坂知事(以下仁坂) ● 早田さんは田辺市出身で、1964年の東京オリンピック体操競技の選手として、団体総合優勝の原動力となり、個人ではつり輪で金メダルを獲得するなど大活躍されました。また現役を引退されてからも後進の指導や、日本体操協会の大活躍を歴任され、体操競技の振興にご尽力されてこられました。まずは体操を始めるきっかけなどを教えてください。

早田卓次(以下早田) ● 1940年、田辺市の芳養という漁師町で生まれました。実家はマグロ船の網元で、大掛かりな漁業をやっていました。それがすごく魅力的で、大人になったらマグロ船に乗って仕事をしたいと思っていました。だから子供の頃の遊びといえば、小型の船に乗り櫓を漕いで沖まで出たり、砂浜を走りたり、網を引いたり、漁師の真似事をするのが日常でした。また小さい頃は

人と話するのが苦手で、常に大人の後ろに隠れているような子供でした。だから遊びも1人でできる逆立ちがいつの間にか得意になっていました。おかげで小学校5年生の頃には、逆立ちで60メートルぐらい歩けるようになっており、それが体操を始めるきっかけになったのかもしれない。そして田辺市立明洋中学校で体操部に入部しましたが、田舎町です

で、体操競技というよりは体操遊びでした(笑)。県立田辺高校に進学してからは、本格的に6種類の体操競技の練習をすることになるのですが、ここでも専用の設備はおろか体育館さえありません。だからあん馬やつり輪、平行棒の器具は自分で設置していました。でも皆、体操が好きだったので、練習だけは休みなしに毎日やっていましたね。顧問の先生も体操は好きでしたが、技術的なアドバイスは全くなく、ただただ好きな体操をしていたという6年間でした。

仁坂 ● しかしきちんとしたコーチもいなかったのに、高校時代には素晴らしい成績を残しておられます。

早田 ● 県の高校選手権で2年連続個人総合優勝をし、3年生の時には近畿大会で個人総合優勝。そして1958年に開催された富山国体では、個人総合2位、平

行棒第1位という成績でした。私もどうしてあんないい結果を出せたんだろう。と不思議に思うほどの成績でした(笑)。この結果がきっかけで、その後の体操人生が変わりました。

施設の整った大学では頑張りすぎて負傷も

仁坂 ● 国体での結果が認められ、多くの大学からのスカウトを受けながら、ここ日本大学に進学し、さらに活躍されますよね。

早田 ● 関西よりは箱根の山を越えて体操したいって気持ちが強くて(笑)。最終的には、関東の大学が一番熱心に誘ってくれた日本大学に進学しました。中学高校の6年間とは異なり、大学には体育館もあり器具も揃い、さらにはコーチや監督までいる。しかし決まった時間には体育館で練習を始めないといけないとか、色々ときつちりとしたルールがあるんですね。田舎で自由にやってきた私にとって不慣れなことばかりで、遅刻などとしてよく監督に叱られていました。とはいえ器具が揃ってる体育館でいつでも練習ができることが嬉しくて(笑)。ついつい練習オーバーになり、大学1年生の時に左足を、さらにその後は反対側のアキレス腱も痛めるなど、とにかく怪我が多かったですね。今では手術しなくても治す方

早田さんが東京オリンピックで獲得した金メダル。(わかやまスポーツ伝承館)

法などもあるようですが、当時はアキレス腱を切るということは、スポーツ選手として致命的な時代でした。

仁坂●そんな大きな怪我を乗り越え、4年生の時にはナショナルチームにも選ばれ、日本のトップ選手の仲間入りをされました。

早田●ナショナルチームに選ばれて嬉しかったのは、合宿に参加すると美味しいものが食べ放題だったことです(笑)。学生時代はお金がなく、水を飲んで空腹をこまかすことも多かったのですが、身体は正直なもので、朝昼晩きちんと食べることで厳しい練習で疲れても、一晩寝ると体力が回復するんですね。特に海外遠征ではお肉をお腹いっぱい食べられるんですけど、気力も体力も充実しましたね。

仁坂●そして1964年の東京オリンピックに出場されるわけですが、どのようない出がありますか。

早田●当時の嬉しかった思い出というと、オリンピックの直前練習のために名古屋に行くのですが、前日に開通したばかりの東海道新幹線に乗せていただいたことですね。

仁坂●私たちは当時の東京オリンピックの状況は、映像や新聞などを見て知っていますが、早田さんはそれに参加し、直接肌で感じてこられたというのが凄いですね。また新幹線の開通や竣工されたばかりの東京タワーなど、日本が高揚している時



わかやまスポーツ伝承館は、和歌山県にゆかりのあるトップアスリートの功績や歴史を紹介、展示する施設。
住所/和歌山市本町2丁目1フォルテワジマ3F 電話/073-423-2215

をされていた時に、田中和仁・理恵・佑典3きょうだいの父、田中章二さんを指導され、卒業後の相談をされた際に、和歌山県へ行くことを勧めてくださったと聞いています。その後章二さんは良き指導者となり、和仁・理恵・佑典という3きょうだいを2012年のロンドンオリンピックへと送り出しました。同一競技において男女の3きょうだいが揃って出場するのは日本オリンピック史上初であり、世界でも例がないことだと聞いていますが、これは元を辿れば早田さんの功績だと思うんですね。その後、2016年にはリオオリンピックで金メダルを獲得した田中佑典選手と共に、早田さんには和歌山県のスポーツ賞の最高位に当たる、スポーツ栄誉賞を授与させていただきました。

早田●田中章二君とは10歳ほど年齢が違

知事対談

早田卓次 × 仁坂吉伸

1964年東京オリンピック 和歌山県知事
金メダリスト

田辺市生まれ。1964年東京オリンピック体操競技金メダリスト。1971年に現役を引退。その後、日本大学で後進の指導にあたり、日本体操協会の役職に就き、日本の体操競技の振興に尽力した。2002年には紫綬褒章、2004年国際体操殿堂入り、2019年に旭日小綬章を受章。



うんですが、彼は本当に体操が好きで、いつも熱心に練習をしていました。特に彼は体が柔らかく、美しい体操を目指してやっていたのを覚えています。実は東京オリンピック女子体操金メダリストのチャスラフスカさんが来日した時に理恵さんの演技を見て、「日本にも女性的な美しさを表現できる素晴らしい体操選手が出てきたね」と褒めていました。そういう点では、章二君の基本を大事にする美しい体操は、確実に3きょうだいに受け継がれていると思います。

早田●実は関西の第一走者でもあったと後からわかり、さらに責任重大だったんだと気付きました(笑)。当日は、和歌山の素晴らしい景色を感じながら、郷里に恩返しをしたいという思いをもって走らせてもらいました。皆さん道道で一生懸命応援してくるんですね。やはり和歌山の人はスポーツへの情熱を持った心温かい人が多く、オリンピックへの期待なども感じました。そんな中で、今、オリンピックについて色々な意見はあると思いますが、やはりオリンピックは世界一の素晴らしい夢や感動を与えてくれる祭典です。個人的にはそれを將來これからの子供たちにぜひ見せてあげたいなと思っています。

仁坂●確かに様々な考え方がありますが、この世界的なコロナ禍の中で、従来通りの華やかなオリンピックはできないかもしれません。しかしそれは人類の長い歴史の中で考えると、そういうオリンピックがあってもいいじゃないかと思うんです。そもそもオリンピックは早田さんがそうだったように、主役であるアスリートが毎日練習し、腕を磨き、それを世界のひとと競う場です。無観客かもしれない、それでもその時点での最善のオリンピックをするのは、困難の中でも人類が歴史を繋いだという点で意味のあることだと私は思います。本日はお忙しい中、ありがとうございました。



わかやまスポーツ伝承館に展示されている早田さんのオリンピック関連品の数々。



代を生で実感されていたんですね。

早田●ところが僕たちは、競技で結果を残すことに必死ですから、周りがどうなっていたかはあまり記憶にないんですよ。それこそ新聞を読みながら、首都高ができたんだってとか、地下鉄〇〇線が開通したねとか話すぐらいで、実際にそれを見に行っただという記憶はあまりないんです(笑)。

仁坂●なるほど。日本代表という重圧の中ではそんな周囲の状況を気にする余裕はありませんよね。そしてオリンピックでは団体でも個人でも、金メダルをお取りになりました。

早田●団体メンバーは、小野さん、遠藤さん、鶴見さん、三栗さんというローマオリンピックで活躍されたベテランと、「山下飛び」で有名な山下さんという凄

い人たちでした。そんな中で、無名で最年少だった私が気を遣うことなく実力を発揮し貢献できたのは、練習から気楽に話ができる雰囲気や環境を作ってくれたこの人達のおかげだと感謝しています。また、とにかくベテランと一緒にいたので、練習量だけは負けまいと必死に準備をしてきたおかげで、当日は練習してきた通りの成果を出すことができました。

夢や感動を繋ぐ、 オリンピック

仁坂●和歌山にはオリンピックに関する注目すべき4つの物語があります。一つは早田さんも出場された1964年の東京オリンピックの開催秘話です。アジアで初めて開催されたオリンピックであり、日本が国際社会に復帰したことを印象付けるものですが、中南米諸国を行脚して東京に一票を投じさせ、東京開催を実現したのが、御坊市にルーツを持つレッド和田勇さんです。第2に時代は遡り1936年に開催されたベルリン大会において、棒高飛びで活躍し、「友情のメダル」としても有名な西田修平さんは那智勝浦町出身。第3に「前畑ガンバレ」と連呼されたフレイズでも有名な水泳選手の前畑秀子さんは橋本市の出身です。そして4番目は早田さんだと思ってるんですよ。それは早田さんが日本大学でコーチ